北陽演舞場の改築とその背景一昭和4年，7年の内部改修をめぐってー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kasai, Junichi, Kasai, Tsukasa, Sawada, Shin メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054194

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

人間社会環境研究　第37号　2019. 3

北陽演舞場の改築とその背景
―昭和４年，７年の内部改修をめぐって―

人間社会環境研究科　客員研究員（本学名誉教授）
笠　井　純　一
人間社会環境研究科　客員研究員
笠　井　津加佐
ひょうごヘリテージ機構H^{2}O世話人（沢田建築文化研究所）
沢　田　　伸

要旨

大正４年（1915），大阪北の新地に建てられた北陽演舞場は，昭和４年（1929），同７年の両度にわたって改築された。本稿は改築の具体的な様相を，設計図，聞取り調査の記録，番付掲載の写真，新聞記事等から，多角的に追究した。その結果，昭和４年の改築は「貴賓席」の撤去，同７年の改築は「観客席の椅子席化」であり，それぞれが演舞場の構造に影響を与えていることが判明した。また改築の背景について，前者は金融恐慌に象徴される経済状況の悪化，後者は生活様式の洋風化と北新地の特殊性が考えられることを論じた。

キーワード

北陽演舞場，貴賓席，椅子席，金融恐慌，生活様式の洋風化

The Study on the Renovation of *Hokuyo-enbujo* : Concerning the Improvement of the Interior in 1929 and 1932

Guest Researcher Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies
(Emeritus Professor at Kanazawa University)
KASAI Junichi
Guest Researcher Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies
KASAI Tsukasa
Manager of the Hyogo Heritage Organization (Sawada Architecture and Culture Laboratory)
SAWADA Shin

Abstract

Hokuyo-enbujo, which was built on Osaka Kita-no-shinchi in 1915, has seen the inside of the buildings renovated twice, in 1929 and in 1932. This study explores the concrete phase of the renovation through floor plans, interviews, photographs taken at the *Hokuyo-naniwaodori*, and newspaper articles. It is our conclusion that the dismantlement of the seats for the guests of honor was the primary purpose of the renovation in 1929 and that the purpose of the 1932 renovations was to exchange *zabuton* seating to chair

seating. In addition, each of the renovations influenced the construction of *Hokuyo-enbujo*. As far as the context for the renovations, the first round of renovations came during a period of deteriorating economic situation due to a financial crisis and the later renovations came during a period of westernization of lifestyle.

Keywords

Hokuyo-enbujo, Reserved seating for honored guests, Chair seating, Financial crisis, Westernization of lifestyle

はじめに

大正４年（1915），大林組によって大阪北の新地に建てられた北陽演舞場は，昭和４年と同７年の二度にわたって改築（内部改修）された。筆者らは先年，創建当初における演舞場の内部構造と観客動線の復原を本誌上で試みたが（以下「前稿」という）[1]，その後調査を進める中で，改築が相当大規模であっただけでなく，復元の裏付けのために行った聞取り調査の結果は，全て改築後の演舞場に関するものであることが判明した。

そこで本稿では，改築の具体的な様相を，残された設計図，聞取り調査記録，番付掲載の写真，新聞記事等の史料をもとに追究する。さらに改築の背景を推測するなかで，昭和戦前期（1927～1945）の上方諸花街・演劇界において，同演舞場がいかなる位置を占めたのかについても言及したい。

なお本稿は，はじめに・第６節を笠井純一，第１・２・５節を笠井津加佐，第３・４節を沢田伸が，それぞれ草稿を分担執筆して持ち寄り，三者で討議を重ねて成稿に至ったものである。

１．先行研究について

北陽演舞場に関する先行研究は，現時点では数少ない。ただ，設計図と写真資料から北陽演舞場を紙上に復原した前記拙稿（2018.3）執筆と相前後して，北陽演舞場の美術資料に関わる論考（橋爪2017）[2]，および演舞場の外観意匠と亀岡末吉に関する論考（廃岡2017）[3]が発表されたが，筆者らは拙稿発表後に確認し得たので，言及出来なかったことをお詫びしたい。

橋爪によれば，本館正面玄関の杉戸に描かれた絵は倉吉博物館所蔵「舞楽青海波」と同一の構図，図柄であるとのことである。さらに，北陽演舞場の杉戸は12枚存在した可能性があるとも指摘されている。

２．改築演舞場復原のための資史料

設計図：大林組から提供された設計図のうち，昭和７年（1932）の改築に関するものは次の４点である。

1．「曾根崎新地歌舞練場/配置図及建築面積計算図/縮尺 百分之一」
2．「曽根崎新地歌舞練場 内部改造工事/地階平面図/縮尺 百分之一」（「敷地付近見取図」を付す）
3．「曽根崎新地歌舞練場 内部改造工事/第一階平面図/縮尺 百分之一」
4．「曽根崎新地歌舞練場 内部改造工事/第二階，第三階平面図/縮尺 百分之一」

上記４点は何れも無番号で，図面左上に三段のラベル（ゴム印ヵ）を付し，「標題/部分/縮尺」を記している。なお，前稿では1.を「22」，2.を「21」として紹介したが，3.および4.については言及していない。

写真：踊の番付に掲載された写真を中心とし，大林組提供写真を参照した。

聞取り調査：調査参加者は，故竹本住太夫氏（1924.10～2018.4）並びに田村富子氏（1924.1～）

である。

竹本住太夫氏の証言は，⑴平成27（2015）年４月23日，竹本氏のご自宅で記録したものである。テープ起しの後，ご本人に記述を確認して頂いたものから，本稿に必要な個所を抜粋した。

田村富子氏の証言は，⑵平成27年12月16日，⑶同30年６月７日，⑷同年９月22日の３記録からなる。⑵は北新地芸妓組合事務所で，⑶・⑷は田村氏のご自宅で記録した。⑵・⑶には西川梅十三氏が同席された。また⑶の実施に際しては大正４年（1915）の，⑷の実施に際しては昭和７年（1932）の復原図（ともに沢田が作成）を示し，証言箇所を図上で確認しながら記録した。

史料調査：踊の番付等から，演舞場に関する記事を採録した。また並行して新聞記事等の調査も行った。

３．改造後の北陽演舞場および改修箇所の要点―設計図からみる

まず，大林組提供の設計図３．および同４．に基づいて作成した，昭和７年（1932）時点の復元図を，図１・２として掲げる。

続いて，改変箇所を表１に纏め，大正４年（1915）の創建時点と比較対照するため，図３・４を掲げた。表１のNo.は，図３・４の①～⑮と対応している。

なお，図１～４および表１は，組版の都合上，文末に掲げた。

４．改造後の北陽演舞場および改修箇所の要点―写真からみる

次に，『北陽浪花踊番付』に掲載された演舞場内部の写真から知られる，北陽演舞場の改築について検討したい。番付には普及版と愛蔵版の少なくとも二種類があるが，写真を掲載するのは愛蔵版のみである。但し，愛蔵版は大正４年（1915）から昭和12年（1937）まで，23年にわたって開催された浪花踊のうち，次の13回分しか現存が知られていない（〔　〕内は所蔵者・機関）。

第１回（大正４）〔佐藤家，大阪市立中央図書館：以下「市中央」と記す〕，第２回（同５）〔佐藤家，大阪府立中之島図書館：以下「中之島」と記す〕，第３回（同６）〔中之島〕，第４回（同６）〔北新地鶴太良〕，第６回（同９）〔佐藤家〕，第７回（同10）〔中之島〕，第８回（同11）〔佐藤家，中之島，市中央〕，第14回（昭和３）〔佐藤家〕，第15回（同4）〔佐藤家，中之島〕，第16回（同５）〔中之島〕，第17回（同６）〔中之島〕，第18回（同７）〔佐藤家〕，第19回（同８）〔肥田晧三氏，中之島〕

筆者らは，上記番付に掲載された写真を精査するうち，演舞場内部の改修は昭和７年だけでなく，同４年にもあったことを知り得た。その具体的な姿を一部知ることも出来たので，以下に写真を掲げ，変更箇所を指摘する。但し，昭和４年，７年番付には印刷不鮮明な箇所があるので，昭和６年，８年番付に掲げられた写真（同一原版）で代用した。

○本館観覧席

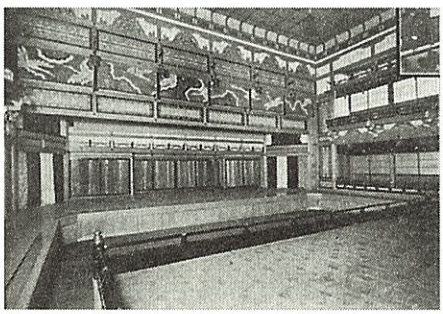


写真１（大正４）「本館舞台」
（佐藤家所蔵 大正４年番付）

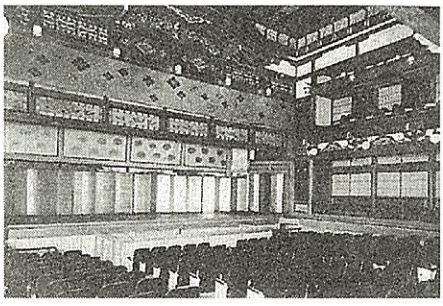


写真２（昭和７）「北陽演舞場観覧席」
（中之島図書館所蔵 昭和８年番付）

1．平土間が椅子席に変更されている。
2．客席後方（貴賓席上部）にあった唐破風が，舞台上部に移設されている。
3．舞台上部，垂れ壁部の欄間および壁画が，変更されている。

○貴賓席（の撤去）

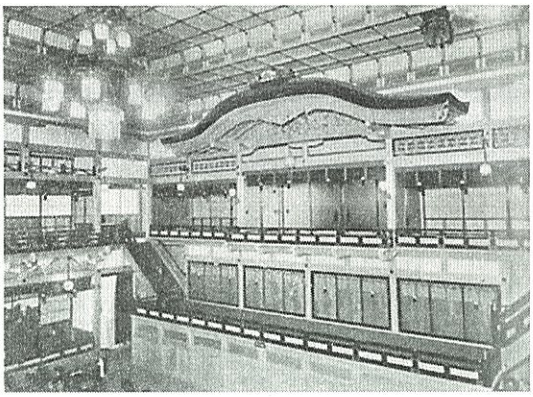


写真３（大正４）「貴賓観覧席」
（佐藤家所蔵 大正４年番付）

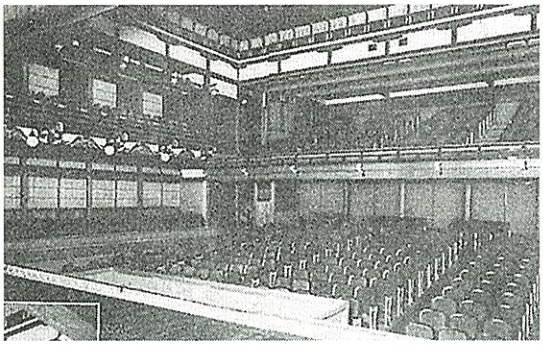


写真５（昭和７）「北陽演舞場観覧席」
（中之島図書館所蔵 昭和８年番付）

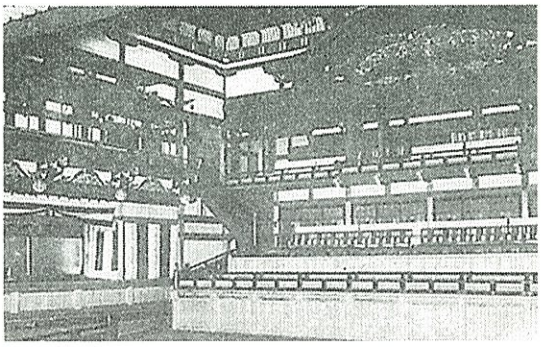


写真４（昭和４）「特等観覧席」
（中之島図書館所蔵 昭和６年番付）

1．昭和４年，「貴賓席」が撤廃され「特等」に統一された。御簾は撤去，唐破風・欄干等は残る。
2．昭和４年，中二階の特等席も雛壇に改修されているように見える。
3．昭和７年の改修で，等級に関わらず総て椅子席に変更。この際，貴賓席上部にあった唐破風が舞台側に移設された。

○貴賓休憩室（喫煙室に改変）

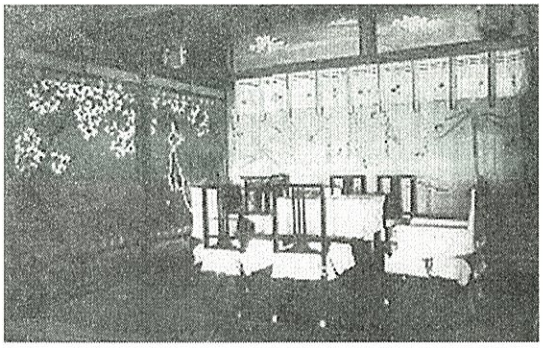


写真６（昭和４）「特等喫煙席」
（中之島図書館所蔵 昭和６年番付）

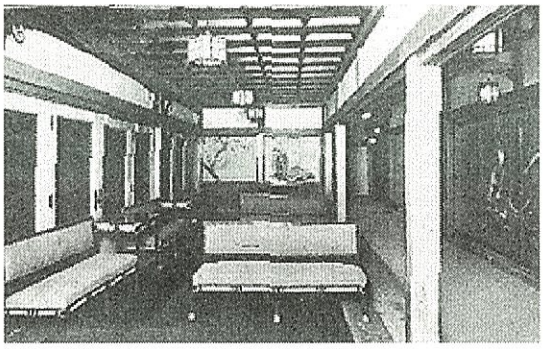


写真７（昭和７）「北陽演舞場喫煙席」
（中之島図書館所蔵 昭和８年番付）



写真８　参考写真（提供：㈱大林組）
「貴賓休憩室次之間―西」



写真９　参考写真（提供：㈱大林組）
「次之間―西から貴賓休憩室を見る」

１．昭和４年「特別喫煙室」：襖絵を見る限り，「貴賓休憩室次之間―西」（写真８）と考えられる。窓側は御簾か。

２．昭和７年「北陽演舞場喫煙室」：幅２間の部屋とその右に廊下が見えることから，貴賓休憩室と次之間部分を東から見たものと考えられる。その際，貴賓休憩室と次之間にあった襖と垂れ壁（欄間）は撤去されたと思われる。（撤去後の痕跡の処理は大変だが……）

○一等待合室

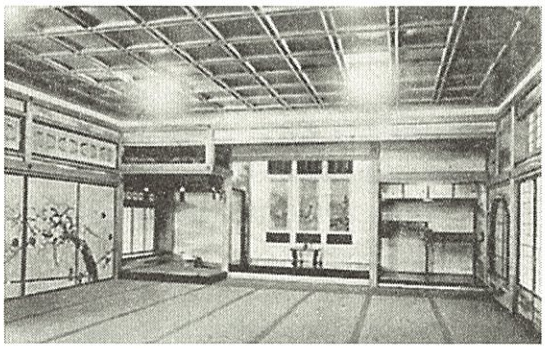


写真10（大正４）「一等待合室」
（佐藤家所蔵　大正４年番付）

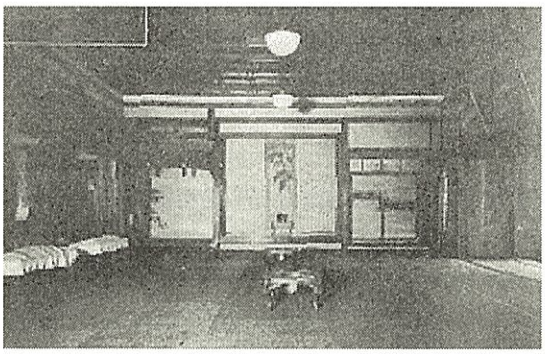


写真11（昭和４）「一等待合室」
（中之島図書館所蔵　昭和６年番付）



写真12（昭和７）「北陽演舞場喫煙室」
（中之島図書館所蔵　昭和８年番付）

１．昭和７年「北陽演舞場喫煙室」：旧「一等待合室」と「入側」の間の襖を撤去し，椅子を設えて喫煙室にしている。床の間・違い棚等は，そのまま残している。

5．改装後の北陽演舞場―聞取り調査の結果から

以上２節にわたって，改築後の北陽演舞場の姿をみてきたが，浪花踊の観客や，出演した芸妓達の目にはどのように映ったであろうか。本節では，故竹本住太夫氏，田村富子氏の証言をもとに探ってみたい。なお，「―」は調査者の発言，(3)田村氏の証言のうち，「梅十三」は西川梅十三氏の発言である。

(1) 故 竹本住太夫氏の証言（平成27年４月23日記録）

「もちろん，しょっちゅう行ってました。それで，戦争中に，文楽をここで10日間やってました。ということは，戦争で日本中が支那事変のニュースが盛んでね。映画のニュース。四ツ橋文楽座がニュース館になったんです。それで，四ツ橋の文楽ではやれんので，北陽演舞場で10日間やってたんです」

―（写真をお見せする）

「こういう浪花踊ですけど，お茶席があって，お茶をよばれて，ざーっとロビーに並んで入るんですけど，いつも賑やかでいっぱいでした」

―（写真を次々とお見せしながら）ご記憶でしょうか？

「これは焼ける前です」

―もちろん，それはこちらの待合の方の入り口だというのですが……

「そうです。これ，……正面です」

―その玄関がどこか……これが入ったところに鶴の板絵が……

「それは忘れてますけど……ええ演舞場でした」

―こちらが演舞場の方の入り口だと思います。

「はい，そうです。ここ正面，ここから入っていきます。それで，僕らが知った時分はもう洋館でしたから…土間は椅子席になってました。これは，焼ける前ですね。こっちに花道があってね……緞帳が下ってます……」

―どんな色合いだったかご記憶ですか？緞帳の色……

「緞帳の色は，覚えがないけど，両方の桟敷があって，そこへ芸妓はんの地方がみんな出て」

―そうですか，なるほど…椅子席になってからの……

「そうでんな，僕ら，椅子席しか知りまへんけど……」

(2) 田村富子氏の証言（平成27年12月16日記録）

―浪花踊は，昭和12年で一旦中断するんですね。

「私のときは一回だけでした。芸者に出て，ぜんぜん，総踊ですわ，うちらは……。大きいお姉さん方はそら……でも，それも一回だけでしたな……」

―それは何年でしたか？

「出たんが……昭和……あてが16で出てん。そやから14年やな」

―14年は，たぶん浪花踊はやってないと思うんですよ。

「あのね……でも，私，一回だけ総踊，出ましてん」

―それは，豊国踊と言うのと違いますか？

「豊国踊って，おましたかな…。なんで，それ，印象あるいうたらね，私，梅玉（うめたま）いう名前で出てましてん。そしたらね，死にはった大阪の梅玉（ばいぎょく）はん，見に来てはる言うのが，印象おましてん。総踊でやってんのにな……大阪の……品のええ……」

―新聞記事のコピーですが，昭和12年のものです。

「うちが14やな，まだ出てしまへんな」

―昭和13年の４月の「大阪春の踊」は中止と，四遊廓の役員会で決めたと。今年は非常時やと言うんです。

「そうそう，おまへなんだやろな。うちら，名前が変って出てたんかな？　名前が違ごたんかな」

―ところが昭和17年になりまして，５年ぶりに浪花踊復活やと，未熟な芸妓さんは出たらあかんというのですけど，とにかく芸をみせるというので，大阪府保安課がやってもいいと言ったらしいんです。

「５年ぶりで？」

―それで，いつもは春ですけど，11月に北の新地と堀江の演舞場で，それを豊国踊と言ってるんです。

「それが17年？…それなら，わてが19のときやな」

―ところが翌年の昭和18年３月になると，やっぱし止めだと……でも京都はやるんですよ。

「むこうさんはな……」

(3) 田村富子氏の証言（平成30年６月７日記録）

「私ら，ここへずっと稽古に行ってたからね」

―今日はその演舞場の話を中心に伺いたいんです。これ，……私の同級生に大学で建築を出た人がいて，こういう演舞場の平面図を……。これ一階ですよね。二階もありますけれど，例えばこっち側が正面ですね。

「入口ですやろ。そうそうこっちが，あの…国道でんねん」
―電車道…
「そうです。うちら，こっちから，皆，部屋入ってた。裏から入ってた」
―ここ，芸妓さんの入り口になってた？
「そうや。入り口。こっから稽古行ってたんです」
―こっから入れて，それが，その，どういう風に控室，舞台へ…
「稽古は，あの踊りの稽古は舞台でしてん」
―ここの楽屋と言うか…お部屋がいくつか。
「あ，部屋数がございましたな」
―そこは，どういう風に使うのですか？　常は？
「常はね。長唄の稽古とか。清元の稽古の部屋を，稽古場にしてました」
―お師匠さんがそこへ。東京から来はって。そこで順番に稽古をされて。
「稽古してはったんです。そして舞台は踊りの稽古だけでした。（中略）それはね，団体稽古やから」
梅十三：楽屋は，清元や何かのお稽古に使いはったんですか？
「そうよ。楽屋から入ってはった。この正面はいつも使わない」
―お客さんの入り口なんですね。
「そう，浪花踊があったときは，開けはります。そやけど，常はこっから入ってました」
―温習会とか，いろいろあったと思いますが，そういうときも，お客さんはこっちから入りますか？　正面玄関からは入りませんよね。さっきお話に出た菅楯彦さんの絵は，正面玄関にありました。
「ああ，そうや。壁画が仰山ありました」
―それはあまり見えないところにある？
「そうそう，隠れてたからね。一般の人，あまり知らはらへんと思う」
―この図，こっちからお客さん入って，一階へ入る人と，いきなり二階入る人とあるみたいですけど。
「だいたい二階は少なかったですね。一階，満員なったら，二階使いますけど…」
―わかりました。この図面は，大正４年に出来たときの図面なんですよ。
「ああ，そうですか」
―大林組さんが持ってはって。それをもとに，これを起こして貰って，この矢印は，観客の動きです。芸妓さんたちや，音曲の方は，後ろから入って。
「そうです。そうです」
―先生方もね。お師匠はんもそうしてた？
「常にはここは閉めてました」
―田村さんがご存知のときは，ここ椅子席じゃなかったですか？
「椅子席でした。初めは座ってはったんです」
―これも今日作って来た資料です……小さい写真ですが，舞台側から見た客席なんですけど，これが貴賓席なんです。ここに唐破風って，屋根がついてますね。ところが，昭和4年に貴賓席なくしはる。
「そうですやろ。それで私おまへん」
―貴賓席なくなって，ここにあった唐破風は，残ってる。
「はあはあ。とらはったからね」
―桟敷というか座席というか，座布団をしいて座る状態らしい。
「そうでっしゃろ。私のときは椅子やったから」
―ところがね，昭和７年になって，また，これ変えはる。
「え？」
―それで，田村さんご存知の椅子にしはる。
「椅子席にしたんですな」
―ところがそれだけでなく，ここにあった屋根を舞台の方へ移した。大林組さんに，図面が残っています。これ，一階の椅子席です。この横に座敷，地方さんが座るときもあるし，補助椅子を入れてお客さんが座るときも…
「あのね。大阪は，京都と違って，こういうときね，地方はこうとこに座りませんでした。舞台にみなちゃんとしてはりました。ここは京都のとこ，祇園町だけです。大阪はそれはありません」
梅十三：何かのときに，使わはったおりがあったんかもしれません。
「私のときはもうなかったです」
―田村さんが知っておられるのは，昭和７年以降ですよね。
「そうですわ。私が16やったから」
―そしたら，もうこれになってますね。二階もこうなって椅子席なんです。
梅十三：椅子席に変ったいうことは聞いています。

―そうですか。ここに，貴賓控室があったんですよ。
「でも，うちらんときは，もう，おませんで」
―そうですか。で，それで煙草を吸う場所になってたらしいです。
「そうでっか…なるほどね」
―大阪でもだんだん洋服になって，草履や下駄履いたり，下足あずけて…，はやりにくくなって。椅子の方がええなということになって…。ほかの劇場もそうみたいですよ。
「そうですやろ。デパートもそうでしたんやろ。大丸もそうや。下駄脱いであがってはったんや。大丸がそうやったんですよ。それがだんだんとして，そのままあがるようになった」
―これは御記憶ありますか？　酒場って書いてあります。
「私らの時分，もうこれなかったな」
―こういうのはなかったですか？（中略）一等，特等の入り口。これがどこか，お茶を飲むところ。
「そうでした。控えのね」
―これは，縁側って言うか。出窓みたいに。
「なってね」
―何か，あまり…。変ってますね。
「変わってまっせ，はい。役員さんが変わるたんびに。北の新地も役員さんが変わりますさかいにな」
―なるほどね。…お茶は椅子席になってからも，やっぱり，点て出しとか，そうされて…
「してはったんですよ，はいはい。でも，私のときから，これ，なかったです。私が芸者になったときは，もう，戦時中でしたやろ」
―そのうち，もう浪花踊は休みだ…と
「もう，浪花踊は，私，一回ぐらいしか出てませんわ。あと，みな戦時中なってしもたからね。そら，北の演舞場もええ演舞場でしたで。ゆったりとしたね。（中略）楽屋口ね…これが国道筋ですわ」
―そうですね。ここ入る時に，札とか…
「ちゃんと。梅玉言うたら，ちゃんとくれはりまんねん。それ，ぶらさげときますねん。着物にぶらさげる。それはね，お師匠さんが，いちいち名前覚えはれへんから」
―あの，芸妓はんの誰が来てへんとか，みんな来たなとかいうようなことが分かるようなものは…？
「わかります。事務所がちゃんと。今日は何の稽古やいうのも分かるから」
―お師匠さんの控室みたいなのはあるんですか？
「もうそんな控室ありません。稽古場へちゃんと入りはります。二階の稽古場もありました」
―この稽古場の中というのは，写真がないんですが，どんなんなってます？　絵とかはありましたか。
「そんなんはおません。ただ稽古場だけ。殺風景なところでしたよ。楽屋，また，別でしたね」
―わかりました…舞台は，廻り舞台はないんですね。
「廻り舞台はなかったと思います」
―すっぽん言うのか，あの，上がるのはあるんですね。
「あったと思います。だけど，廻り舞台はない」
―こういう一等とか二等とかの大きい大広間ありますね。こういうとこでお稽古…
「やっぱり地方さんの。ほんで，人数の少ない踊りのときは，こういうとこ使うてました。（中略）東京から来はるお師匠さんで，団体稽古がありまんねん。十人とか二十人とか，そういうときには舞台を使うてました。そして温習会とか何かの踊りの稽古やったら，こういうとこ使うてました。（中略）日本間を。団体稽古だけは舞台を使うてました」

(4) 田村富子氏の証言（平成30年9月22日記録）

「私，16からやからなあ」
―16歳で芸妓さんになられて…，一番記憶のいい頃ですよ。
「清元とか長唄とかは，二階のお部屋で稽古しておられたと思う。三階までは行きませんやろ。踊は舞台でした……」
―一・二等休憩室とかも使うんですか？
「それは，踊りの待合でしょ。使いませんなぁ。…どっか部屋がある筈ですは。着物着替えたり，その部屋は何処にあったか，私の記憶おませんけど…一階やと思います，そういう所は…，二階にはありません」
―地下に通路があったんですけど…
「その時分はもう，使いません。花道へは，お客さんが分からん廊下を通過する…」
―ここに，地階から上がって来る回り階段みたいなのがありますが…
「私らの時分には，それはなかったは」
―椅子席になったら，どこが一等席なのか…分かりますか。

「一等とか二等，私らの時分はなかったは，もう浪花踊なんかやったら，追い込みでっせ」

―客席ですが，唐破風がついていて，ここが貴賓席。

「私らの時分には，そこはおません」

―昭和４年，…番付のキャプションが「特等観覧席」になっています…

「うちらの時も，そんなん無かったは」

―昭和７年，椅子席になって，「北陽演舞場観覧席」になっています…

「私らの時分，もう追い込みでした。一等や二等なんて，ありませんでした」

―例えば，華族の人なんかが来られても，同じですか？

「その時代は，そんな方なかった。戦時中でしたから…」

―梅玉（ばいぎょく）さんなんかは？

「後ろにちょっと立って見てはった。時間が急いたんでしょう，役者はんやから…」

―オーケストラについては…

「ボックスあったの？　忘れてるは。…それいうのがね，むかし大西の芸妓はん，洋楽をしてはったんや。そやけど，それはうちらの時は，もうなくなってた」

―貴賓室ですが，大林組さんの写真です。

「あのね，壁画なんかにはね，女の絵描きさん…生田花朝さん，も一人なんやら云う人の…あったのよ。菅楯彦さんのもあったんや」

―これは，猪飼嘯谷という人の絵です。

「私らのおった時分，これ知らんは。私らの時分，直してはったんと違うかしら」

―この絵が，ここにあるでしょ。昭和４年に貴賓室をなくしたとき，控室と一緒に喫煙室にしたようです。

「わたしらの時，もう皆しまってはったと思う。戦時中やから，殺風景でしたで。でも，ここまで来ないもん。稽古すんだら，もう帰ってたもん。私ら，外のことあんまり知らん…」

―特等喫煙室も，「北陽演舞場喫煙室」にキャプションが変っています。

「もうそんなんありませんでした。そんなんしてたら怒られるもん。もうみんな，挺身隊行ってはったよ。私，病気したから，行かんでよろしおました…。朝はよから，芸妓さんが朝はよ起きることないのに…」

―特等，一等のお客さんは……

「それはね，お茶屋さんが，ご贔屓のお客さん来はったらご案内していた筈や。一見さんでは来れないから。北の新地で165軒あったんやから。お客さん来はったら，そこのお茶屋の仲居さんらがご案内に皆行ったわけよ。切符も皆，お茶屋さんが差配してるわけよ。大阪も京都の祇園と同じようにしてたんですもん…」

―浴室ってありますけど……

「それはね，ここで浪花踊のあと，お白粉はがしたら，こういうとこでお風呂入りますやろ」

以上４記録の内，竹本住太夫氏の証言（1）は，次の理由から，昭和12～13年の記憶を中心に語られたものと推定される。『近代歌舞伎年表大阪篇』によれば，四ツ橋文楽座が「事変ニュース館」となったのが昭和12年８月のことで，人形浄瑠璃はしばらく北陽演舞場または新町演舞場で上演された。北陽では，昭和12年10月10日から17日まで，同年12月１日から10日まで，同13年１月２日から11日まで，同３月16日から25日までと，竹本氏の記憶通り約10日間ずつの上演記録が残っている。新町もほぼ同様であるが，昭和13年４月2日から11日の上演を最後に記録が絶えている[4]。

一方，田村富子氏の証言（2）～（4）は，ご本人が昭和14年，数え年16歳で北の新地の芸妓に出ている（妓名：梅玉（うめたま），大西席）[5]ので，それ以降の記憶に基づくものであり，証言（1）とは時期的に少しずれている。証言によれば，田村氏は一度だけ，戦前の「浪花踊」に立方として出演し，その舞台を歌舞伎役者：三代目中村梅玉（ばいぎょく）（1875～1948）が見に来たという。しかし北陽浪花踊は，田村氏が芸妓となる以前，昭和12年５月上演をもって休演している[6]。おそらく，昭和17年11月１日から18日まで，北陽・堀江両演舞場で開催された四花街共演の「豊国踊」のことを，北陽では「浪花踊」と呼んだのであろう[7]。

両者の証言からは昭和７年以前の知見は得られないが，設計図や写真からは読み取れない事実を多数含んでいて貴重である。例えば，昭和12年前後には，待合室で「抹茶」の接待があり（但し特等・一等），そのあと観客はロビーに並んで，一

斉に観覧席に入ったという（ロビーとは，二階廊下のことか）。しかし，戦争が激化した昭和14年以降は，茶席そのものがなくなった。また「特等・一等・二等」の区分も，田村氏が知る頃には既に撤廃され，観客は「追い込み」で一階席から埋めていったらしい。

舞台等の使い方にも，時期による違いが現れている。昭和12年前後は「地方」が花道横の地方席に並んでいたが，昭和17年頃には舞台に並んだようである。また同時期には，花道の端に設けられた鳥屋口や，そこに至る地下通路は一切使われない。ただこれは，「豊国踊」が四花街合同で開かれたため，北陽演舞場に不案内な他花街芸妓のことを考慮し，臨時に使用法を変えたものかもしれない。

以上，聞取り調査で得られた事実は数多いが，一つだけ注意すべきことがある。それは座席等級の撤廃時期についてで，番付写真に付されたキャプションからは，既に椅子席改修時点で廃止されたように読み取れ（第４節参照），田村氏証言もそれを裏付けるかのようだが，等級は少なくとも昭和12年までは存続した。すなわち，第23回浪花踊を宣伝する『大阪毎日新聞』の全面広告には，「観覧料　特等 3.00，一等 2.00，二等 0.80」と明記されている[8]。おそらく「浪花踊」休止とともに，貸館が演舞場の大きな収入源となり[9]，等級は次第に曖昧化していったのではあるまいか。

６．北陽演舞場改築の背景－むすびにかえて

以上５節にわたって，昭和4年（1929）および同７年における，北陽演舞場の改築を跡づけて来た。最後に，このような改変をもたらした社会的背景について言及しておきたい。

１）貴賓席撤去（昭和４）の背景

北陽演舞場は大正４年（1915），希に見る美術建築として創建された。大林組の営利を離れた尽力もあって，外観の威容だけでなく，内装の優美さについても，この建物は他の追随を許さぬものであった[10]。

内装の美は「貴賓室」に象徴されるが，これを築後わずか15年弱で撤去したのは何故であろうか。名案はないが，他花街演舞場における「貴賓席」を検討するなかで，考察の糸口を探りたい。

まず，大阪花街が範とした京都祇園甲部の歌舞練場は，夙に明治６年（1873）花見小路に建設されたが，その構造は未詳である。大正２年，旧歌舞練場の「頽破」「狭隘」を理由に現在地に新築された。新歌舞練場は，舞台観覧席（494坪余），点茶席･待合席（二階建，122坪余），普通待合席（二階建，94坪余），楽屋（二階建，134坪），貴賓用玄関・休憩室（34坪余）などからなっていた[11]。

次の写真は，『第47回都をどり番付』（大正５年）から採録した，竣工後間もない歌舞練場の「場内貴賓席」および「特等観覧席」である。

写真13は，恐らく歌舞練場「別館」の西南隅に設けられた「貴賓室」だと思われる（井上年和(2016)[12]による）。また貴賓の観覧席については番付に特段の記載はないが，写真14中央部の，雪洞を左右に配し御簾を垂らした座席がこれに該当するのではあるまいか。そうであれば，これらを北陽の「貴賓休憩室」「貴賓観覧席」と比較する時，襖絵や調度，他の座席との高低差など，何れをとっても北陽の特別な豪華さが際立っている。両者の建築時期が近似しているだけに，この差異は看過し難いものがある。

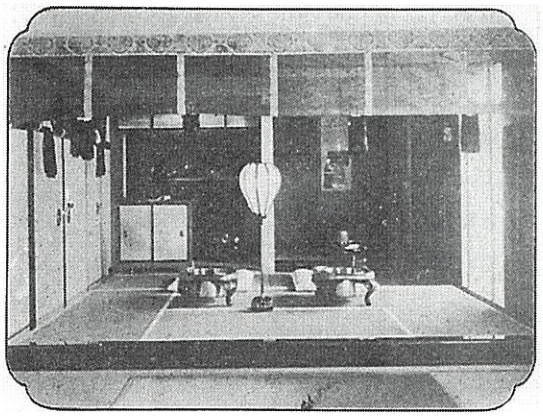


写真13　祇園甲部歌舞練場「場内貴賓席」
（金沢大学所蔵『第47回都をどり番付』）

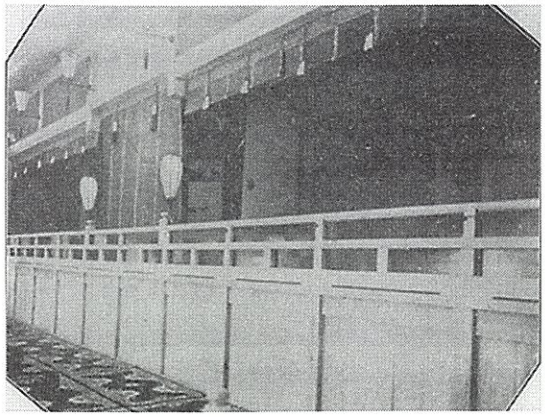


写真14　祇園甲部歌舞練場「特等観覧席」
（写真13に同じ）

次に大阪諸花街の演舞場をみておきたい。大阪最古の演舞場は，明治15年に建てられ，同23年に焼失した北新地歌舞練場と思われるが，それを描いた絵画すら知られておらず，追究の余地はない。

次に南地演舞場は明治21年に建築されたが，同43年の火災で全焼し，その翌年，難波新地五番町に和洋折衷の演舞場が再建された。この建物は昭和12年に取り壊されるまで存続したが，写真が少なく，図面は知られていない。「貴賓席」の有無なども未詳である[13]。

新町では明治25年に演舞場が建築され，明治年間に事務所や待合室を増築したが，大正８年に建物全部を公売に付し，跡地に鉄筋の新演舞場を建築した。「階上に二段の桟敷席を配置」し，その写真も掲載されている。また各室配置は，一階に「一等待合室，同予備室，観覧席」があり，二階は「特等待合室，貴賓室（第一～第三），貴賓観覧席」とあるので，「階上の桟敷席」は貴賓席であったと推断される[14]。

堀江演舞場は大正３年に創建され，「貴賓及び特等待合室」を八角殿堂におさめ，貴賓観覧席は正面の高台に設けたといい，写真も番付に掲載されている[15]。しかし，この建物は翌々年に焼失したので，大正７年に再建した。新しい貴賓席については，番付に「特等席の後方中央部には，何時にても区画して貴賓席に充つべき設備をなし，洗朱塗の高欄を付し，金砂子額縁の襖を閉て，その前面より東西桟敷にかけて平目緑青の簾をかけたり」と記されている[16]。

次に，観客席の様子がわかる写真を掲げよう。

大正３年の堀江貴賓席は，一等以下の観覧席より遥かに高位置に置かれており，北陽の貴賓席と近似している。しかし再建後のそれは豪華な設えではあるが，「何時にても区画して貴賓席に充つべき設備」に過ぎなかった。祇園甲部歌舞練場（大正２）にやや近いイメージである。一方，新町の貴賓席は誠にシンプルで，一般席からの視線を遮る建具などは，一切置かれていない。

以上の諸事例から知られるように，北陽演舞場の貴賓観覧席・休憩室は，その創建当時においてさえ異彩を放つ存在であった。ましてや昭和期に入って銀行の経営が悪化し，昭和２年３月の蔵相失言をきっかけに取付け騒ぎが起こり，企業の倒

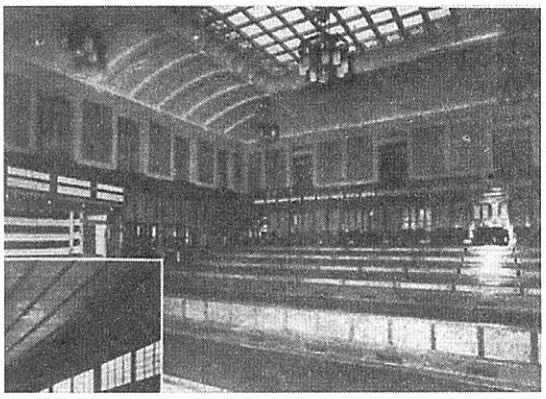


写真15　新町演舞場の観覧席（大正11）
（大阪市立中央図書館所蔵 大正11年番付）

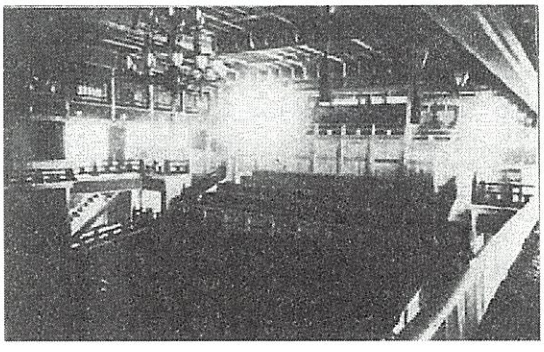


写真16　堀江演舞場の観覧席（大正３）
（国立国会図書館所蔵 大正３年番付）

産や休業なども相次ぐ，いわゆる金融恐慌の状況が続くなかで，花街経営も深刻化したのではなかろうか。殊に北新地は，企業や官庁など大阪の政治・経済に直結する人士が集まる花街であった。このような状況下で，貴賓の観覧席や休憩室は「奢侈」と見なされ，また経営課題としても特等・一等座席を増やす途が選ばれたのではなかろうか。

2）座席の椅子席化（昭和７年）

日本の伝統的観覧席は枡席や平土間で，その椅子席化は東京で始まったが，関西への普及はかなり遅れるようで，祇園甲部歌舞練場は戦後の改築でようやく平土間を廃し，椅子席を導入している。それでは，大阪の諸劇場・演舞場はどうであったろうか。

花街演舞場のうち，最も早く椅子席を採用したのは新町であった。大正11年の新築を機に，新町では平土間（二等席）に「百余の椅子席」を置き，また「二段の椅子桟敷席」（写真15参照）を設けている[17]。後者はおそらく特等席の一部と考えられるが，鉄筋コンクリート造の建物と相まって，花街における新しい試みとして注目される。また南地では昭和８年（北陽が椅子席を採用した翌年）になって，「靴，草履の御方は其儘御入場願ます」と番付に記載している[18]。南地五花街では演舞場大改築を理由に，昭和７年の「芦辺踊」を休業しているから[19]，この時に椅子席を導入したのであろうか。

花街以外では，昭和４年11月改築竣工の京都南座が，ほとんど椅子席になった[20]。また同５年１月竣工の大阪四ツ橋文楽座も，かなりの部分が椅子席となっている[21]。同７年９月竣工の大阪歌舞伎座は殆どの観客席が椅子席で構成され[22]，同月に改装・落成した中座も，枡席を撤廃して椅子席に変えた[23]。

以上の流れをみれば，椅子席への転換は時代の要請であったと言えよう。ましてや北新地は，「この花街ほど洋服の看客の多いところは無い」[24]とまで言われていたのである。北陽演舞場の全面椅子席化は，自然な流れであった。

筆者らは，北新地をはじめとする大阪四花街と社会との関係について，幾つかの論考を発表してきた。本稿はその一環として，設計図・写真など物的資料，聞取り調査記録，文献史料などを素材に，北陽演舞場の改築とその背景を論じたが，一つの素材から推定される「事実」が，他素材から知られる「事実」と相矛盾し，史料（資料）批判を経て初めて解決に近づくという，“歴史学の常道”を幾度か経験することがあった。ただ本稿で到達した成果も未熟と思われるので，大方のご批判を庶幾する次第である。

【注】

1) 笠井純一・笠井津加佐・沢田仲「北陽演舞場という「場」と浪花踊観客の動線―設計図と写真から紙上に復元する―」（『人間社会環境研究』第35号，2018. 3）。

2) 橋爪節也「大大阪の画家たち　第二回　菅楯彦と花街，舞楽，浪速風俗」（『やそしま』第11号，2017. 12）。

3) 廣岡幸義「北陽（北新地）演舞場の外観意匠・平面構成と技術者について」（『日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系』第57号，2017. 6）。

4) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 大阪篇』第８巻（八木書店，1993）643頁以下による（典拠は，高木浩志編『文楽興行記録 昭和篇』他）。

5) 笠井純一・笠井津加佐「戦前期「北の新地」街並みの復原―竹本住大夫氏，田村富子氏，肥田晧三氏，西川梅十三氏の聞取り記録と文献史料をもとに―」（『金沢大学日本史学研究室紀要』第３号，2017. 3）に掲げた「調査参加者の略歴・田村富子氏」による。

6) 笠井津加佐・笠井純一「北陽浪花踊の新出史料と大阪四花街「春の踊」の変遷」（『人間社会環境研究』第32号，2016. 9）による。

7) 『大阪毎日新聞』昭和17年10月21日付紙面「浪花踊十一月から復活　大阪府保安課の英断で，今年から五年ぶりに復活することになった大阪の浪花踊は，名も豊国踊と改めて，十一月一日から十八日まで，北陽・堀江両演舞場で開幕することになつた」。正式名称は「豊国踊」であるが，新聞記

事でも「浪花踊」復活を謳っている。

8) 『大阪毎日新聞』昭和12年５月５日全面広告「北陽浪花踊　偲面影浪花色彩（しのぶおもかげなにわのいろどり）」。

9) 『第18回浪花おどり番付』（愛蔵版，1932）には，以下のような演舞場貸館の「お勧め」がある（料金表は省略）。

御客様方の御便利の為改造いたしました当演舞場を御利用下さい。

一，御客席は全部椅子席に改造して靴草履のお方は其まゝに入場出来ます。

一，使用料金は左の通りであります規定料金の外祝儀心付等一切申受けませんから御使用者は規定料金の支払のみで外に少しも気を御使ひになる御心配はいりませぬ。

一，舞台使用の外宴会其他御催し物の内容に就きましても懇切に御相談申上げます。

一，舞踊会演奏会等の場合は持合せの舞台用品は御貸し申上げます。

一，和洋食堂の設備があります。

10) 注１）拙稿参照。

11) 『第47回都をどり番付』（京都市祇園町歌舞練場，1916）による。

12) 井上年和「祇園甲部歌舞練場別館の建築的特徴」（『日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）』2016.8）。

13) 『芦辺踊番付』は，第37～39回，第42～48回，第50～53回を閲覧したが，演舞場内観写真は掲載されない。

14) 『第12回浪花踊番付』（新町廓，1922）による。

15) 『第１回木花踊番付』（堀江演舞場，1914）による。

16) 『第４回木花踊番付』（堀江演舞場，1918）による。

17) 注14）参照。

18) 『第48回あしべ踊番付』（南地五花街，1933）による。

19) 『大阪毎日新聞』昭和７年２月14日付紙面「芦辺踊は休演…今年は会場の南演舞場に大改築を施す計画で…」。

20) 『大阪朝日新聞』昭和4年11月14日付紙面，中川芳三編『昭和の南座』（松竹株式会社，1991）。

21) 青木繁・山田和人構成『吉永孝雄の 私説 昭和の文楽』（和泉書院，1995）９頁。

22) 『大阪朝日新聞』昭和７年９月11日付紙面「一，二階の両桟敷と二階正面だけが畳敷の座席で他は全部椅子席」。

23) 『大阪毎日新聞』昭和７年８月25日付紙面「中座のマスも，時代には勝てず椅子席に転換」。

24) 松川二郎『三都花街めぐり』（誠文堂，1932年）148頁。

謝辞

本稿の基礎資料をご提供くださり，掲載を許可してくださった大林組総務部社史課に，厚く御礼申し上げます。荒田智康様には，特にお世話になりました。また，聞取り調査にご協力くださいました故竹本住太夫氏，田村富子氏に厚く御礼申し上げます。田村氏の聞取り調査にご同席くださった西川梅十三氏，文献調査その他でお世話になっている，関西大学図書館，大阪市立中央図書館，大阪府立中之島図書館，大阪市史編纂所，大阪大学附属図書館，本学人間社会系事務部・附属図書館の皆様に深謝いたします。

（付記）本稿は，笠井純一を研究代表者とする科学研究費助成事業「戦前期大阪花街の社会的機能に関する基礎的研究：芸能と社会との関係を中心に」（基盤研究（C），課題番号：18K00925，2018～2020年度）による研究成果の一部である。

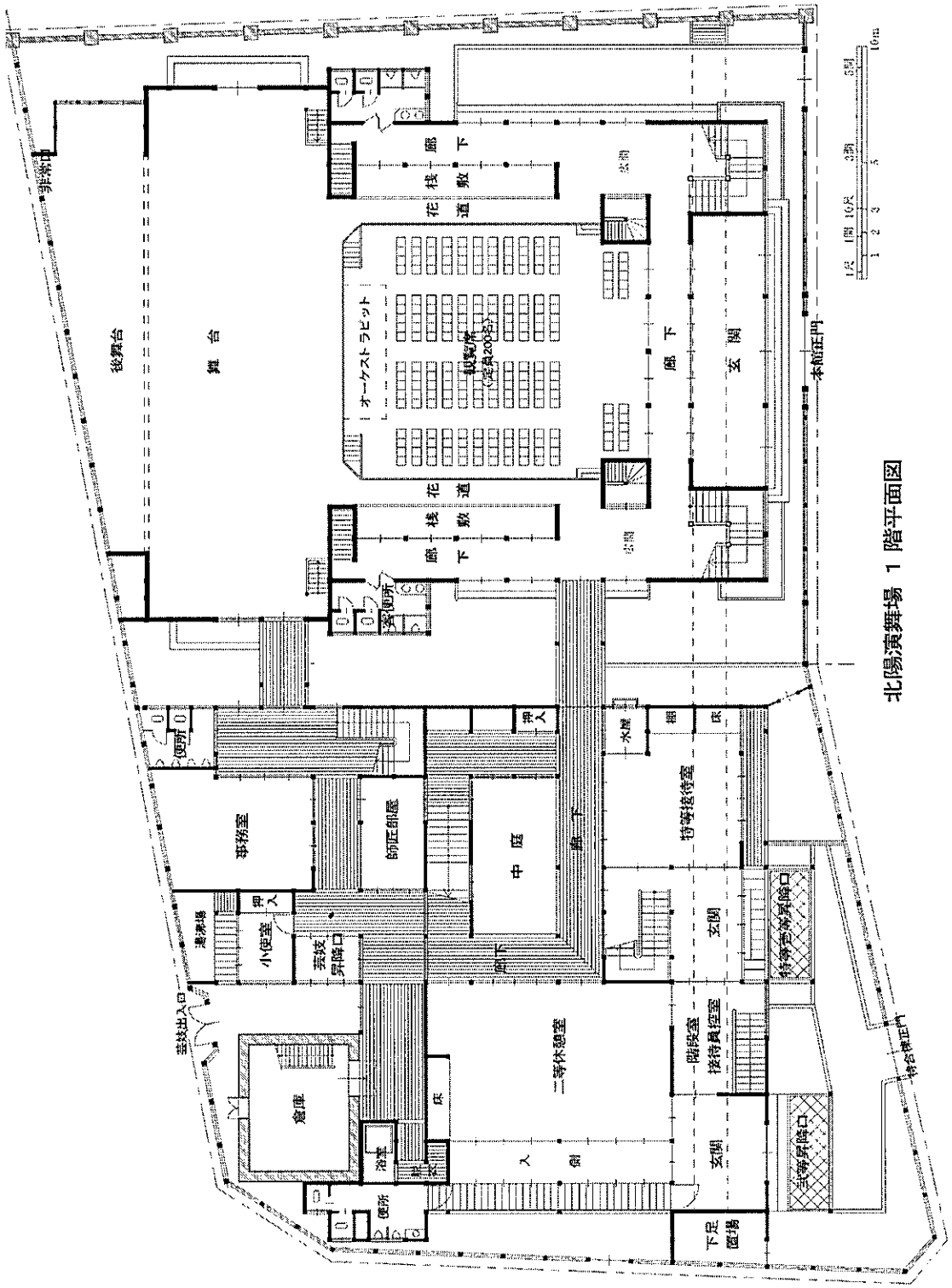


図1　改造後の北陽演舞場（1階）

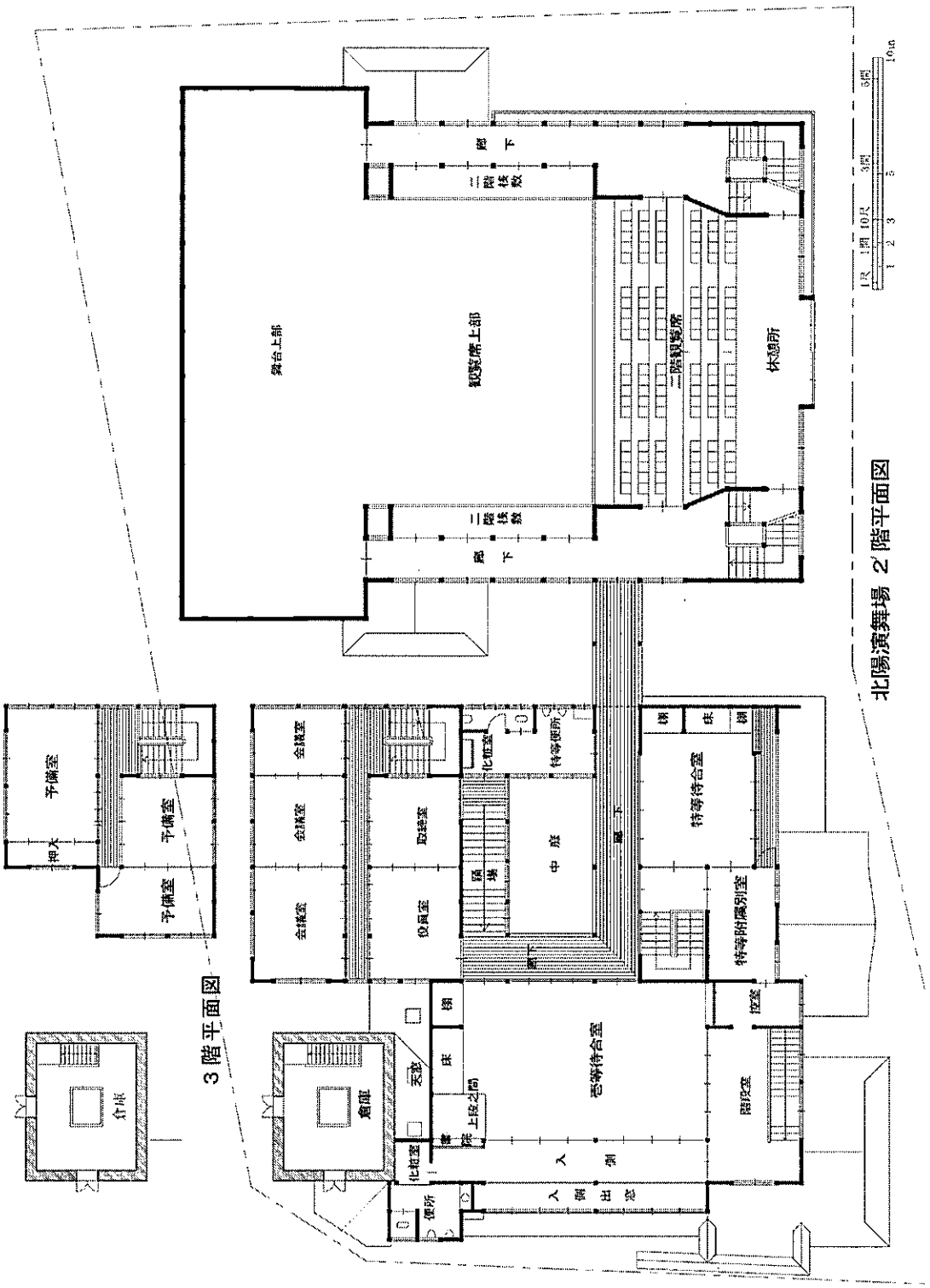
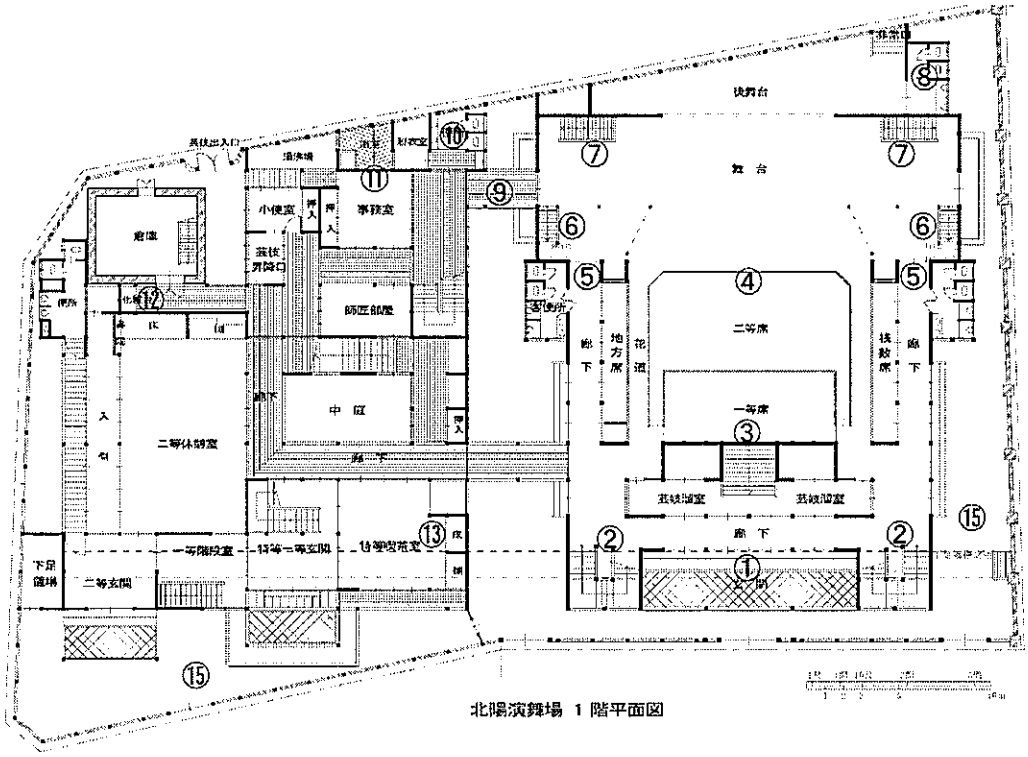


図２　改造後の北陽演舞場（２・３階）

表１．設計図から見た昭和７年の改変箇所一覧（No.は，図３・４に記載した番号を示す。

No.	改変箇所	改変理由（推定）
1	本館棟玄関外部および踏込部： 玄関踏込部を廊下の高さまでかさ上げし，玄関外部に階段を設けた。	土足のまま使用するため，踏込を解消した。
2	本館玄関横の2カ所の階段： 昇り勝手を反転（右回りを左回りに，左回りを右回りに）させた。	2階を椅子席にする際傾斜床としたが，その最上部（休憩所）まで，階段で昇れるようにする必要があった。
3	本館1階客席： 座席から椅子席に改変するに当り，芸妓溜室・倉庫等を撤去し，中央の地下に至る階段を塞いで，客席とした。代わりに地下に至る階段を旧芸妓溜室の東端・西端の2カ所に設けた。	椅子席への改変に対応するため。 2カ所の階段は，地下から鳥屋口に達するため。
4	本館棟1階客席前方： ・オーケストラピットを新設した。 ・オーケストラピットに上る階段を，2カ所新設した。	「大西オーケストラ」演奏のため。
5	本館棟1階両袖廊下： 廊下の突き当りに，地下に至る階段を新設した。	一旦地下に下り，オーケストラピット横に至る階段。
6	本館棟舞台： 舞台袖の上部に至る2カ所の階段を廃止した（図面には，舞台上部に上がる階段は見当たらない）。	不明（渡廊下を南に移動⑥させたためか。舞台上部に上がる必要はなくなったのか）。
7	本館棟舞台： 舞台奥にあった地下に至る2カ所の階段を，舞台袖客席寄りの位置に変更した。	不明。
8	本館棟舞台： 便所を撤去し，後舞台の一部とした。	不明。
9	待合棟から舞台に至る渡廊下： 南に移動させた。	不明。
10	待合棟1階北西隅便所： 大便所部分を撤去し，西側壁を少し西にずらして脱衣場の入口を壁に変更した。これにより，大便器数2，小便器数4（従前は2）とした。	不明。
11	待合棟1階事務室・浴室： 事務室北の浴室と脱衣場を撤去し，事務室西側の押入れと湯沸室の一部を取り込んで，事務室を拡げた（代替浴室は，二等休憩室の北西部に設置）。	事務室が手狭になったためと考えられる。
12	待合室1階二等休憩室北の廊下： 二等休憩室北側の廊下を拡幅し，浴室を新設した。それに伴い，二等休憩室の床周りを改変した。	廊下拡幅の意図は不明。
13	待合棟1階特等喫茶室： 水屋に出窓を新設，床と棚の位置を変更した。	不明。
14	本館2階貴賓席特等席等： 貴賓休憩室・次之間・特等席・中二階特等席を撤去し，椅子席とした（床は見やすくするため階段状に，最後部は休憩所とした）。	椅子席への改変に対応するため。但し，貴賓席の撤去は昭和4年（第4節参照）。
15	外部： 玄関周りの余地の部分を，鋪石敷とした。	泥の持ち込みを抑制するためか。 非常時の避難ルート確保のためか（本館東側）。



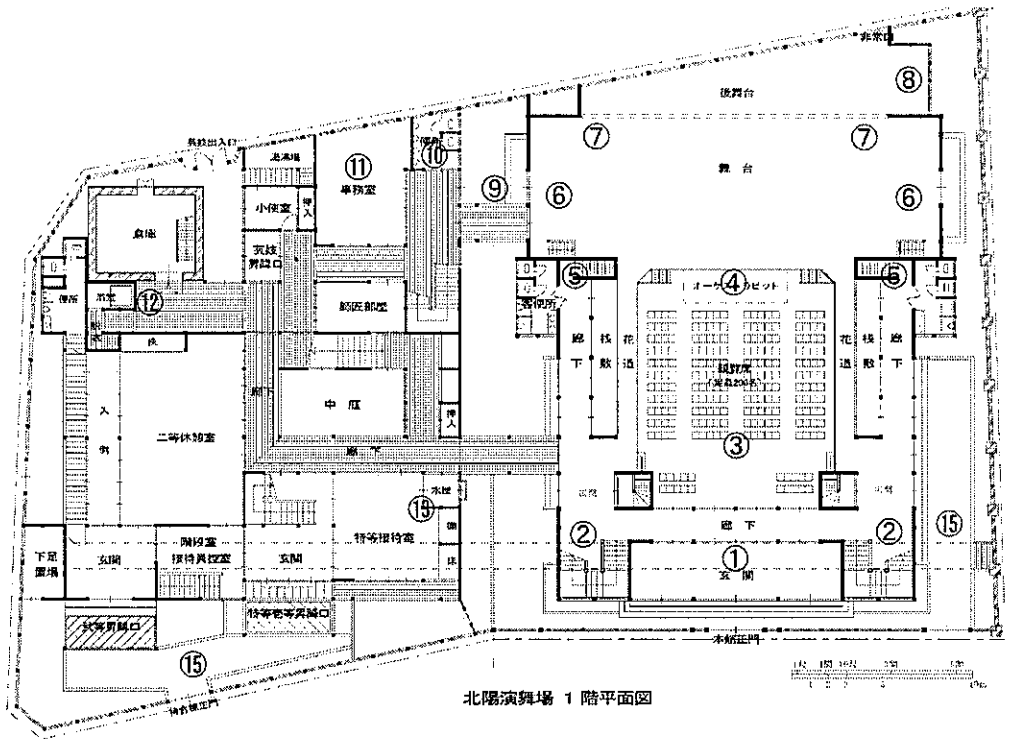
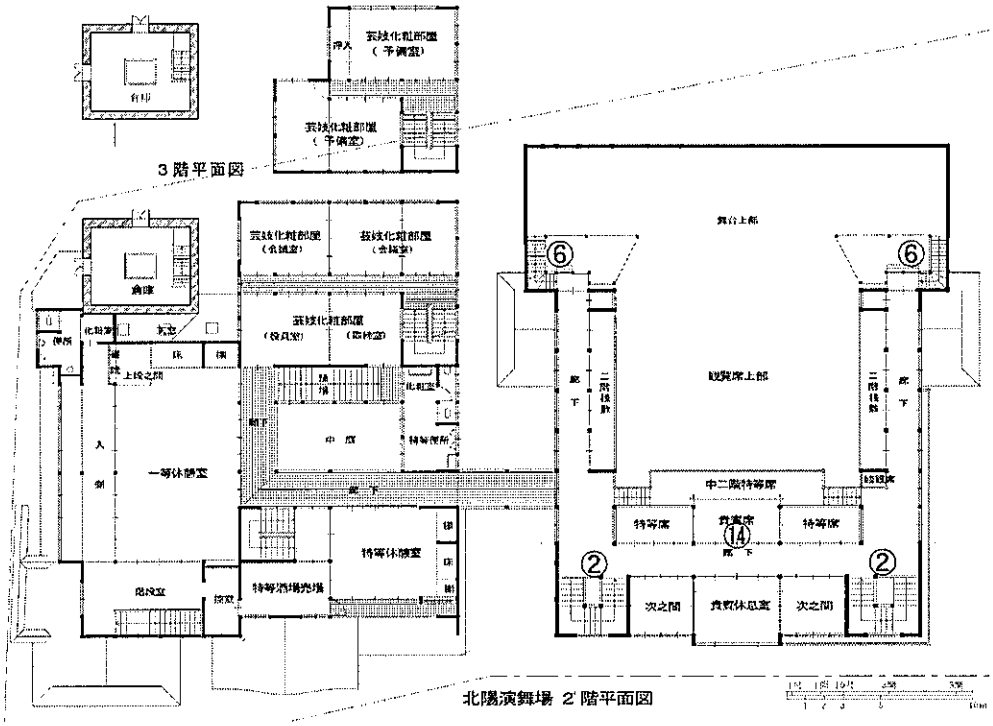


図３　大正４年平面図（上）と昭和７年平面図（下）の比較（１階）



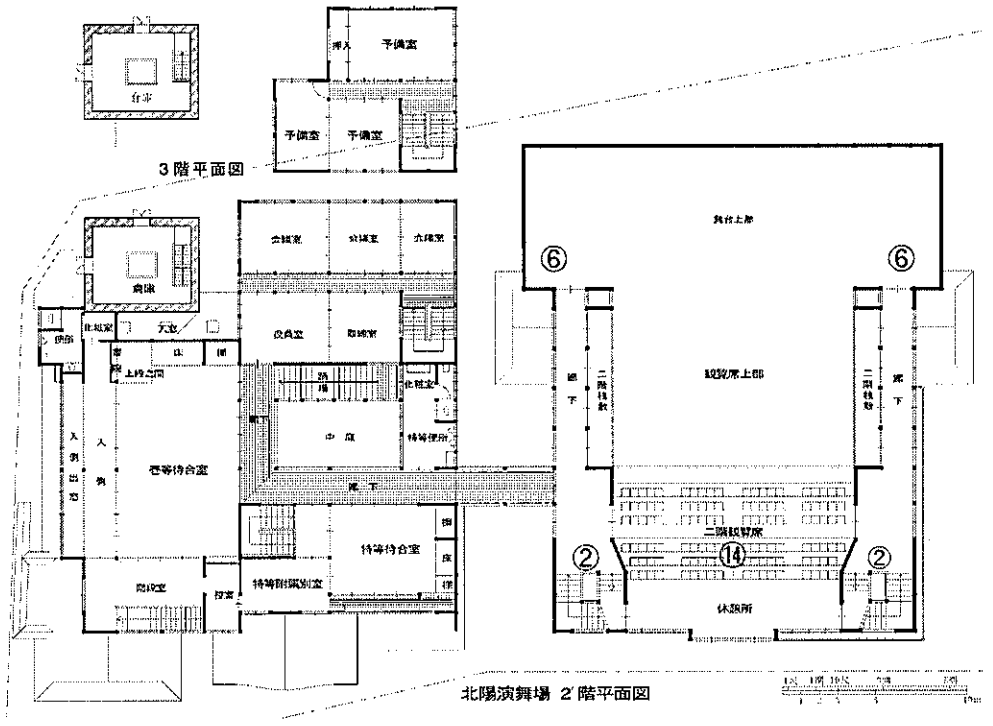


図4　大正4年平面図（上）と昭和7年平面図（下）の比較（2階）